

野田研一教授退任記念特集

— 送辭 —

平賀正子

野田研一教授主要著作一覧

— 献呈論文 —

中村優子

交感！交歓！

——野田研一先生と紡いだ16年——

平賀正子

Masako HIRAGA

野田研一先生と初めてお目にかかったのは、2000年1月に行われた人事面接だった。タッカーホール1階入り口近くにあった狭い応接室、私だけが紺色のリクルート・スーツ姿で緊張していた。少々古びた応接セットに座り膝をつき合わせるように和気藹々と面接が行われたこと、先生方がセーターやジーンズというカジュアルな服装だったことにビックリしたのを昨日のことのように思い出す。「自由の学府」を強く印象づけられた1日だった。それから早16年が過ぎ、野田先生のご退任の日が近づいている。私自身も来年定年を迎えるのだから、立教での日々を一番長く一番身近に過ごした仲間の一人だといえる。

2000年4月に着任し、立教大学での仕事の一つが「新研究科の創設」であることを知った。独立研究科開設準備室が作られ、野田研一先生と鳥飼玖美子先生をリーダーに、久米昭元先生と私の4名で、「異文化コミュニケーション研究科」をどのように具体的に立ち上げるのかについて、教育理念やカリキュラム、教育指導体制などについて構想を練り、実現へ向けて一步一步進んでいった。2002年4月の開設時には、大学院としては異例の5倍という高倍率の入試に合格した30余名の第一期生を迎えた。「異文化コミュニケーション」という言葉さえまだあまり知られていなかった時代に、これからの私たちの歩みが、革新的な研究、開かれた教育、そして社会実践への道を切り拓くのだという確信と期待に身が引き締まる瞬間を皆で共有していた。その中で、論理的な筋立て、確固たる信念、かつ穏やかな物腰で私たちを繋ぐ要の役割を果たしてくれたのが野田先生である。

異文化コミュニケーション研究科は開設以来、学際性、理論と実践の往還、分野横断的複数指導体制という理念に基づいた教育を行ってきた。異文化コミュニケーションを核に、言語コミュニケーション、通訳翻訳コミュニケーション、環境コミュニケーションという四つの研究領域が有機的に関連し合い、「異文化コミュニケーション学」を創出し発展させていくことは、簡単ではない。このようなミッションを果たすには、教員間の相互理解、連携や協力が何ものにもまさる。研究科が革新性を発揮し、発展していく過程で取り組んだプロジェクトは、研究科専任教員全員を研究分担者として獲得した競争的研究資金によって遂行されていった。野田先生はいつも計画の中心で指導的な貢献をされてきた。科学研究費基盤研究B2件(2006-8, 2009-11)、文部科学省『「魅力ある大学院教育」イニシアティブ』(2005-6)、立教大学学術推進特別重点資金(SFR)2件(2005, 2008)、創立10周年記念出版『異文化コミュニケーション学への招待』(みすず書房, 2011)、連続公開講演会80件(2001-2014)である。10年間という長きにわたり、野

田先生が企画された「環境と文学のあいだ」と題する公開講演会は、環境コミュニケーションという分野を世に問い、その新しい展開を模索されたものである。

さらに驚嘆すべきは、ご自身もまた研究代表者として科学研究費を何年も続けて獲得され、環境文学の分野を牽引する学会や研究会を組織し、数々の名著を世に送り出してこられたことである。とりわけネイチャーライティングにおいて「交感 (correspondence)」という概念を鍵に説得力ある論考、閃きにあふれた分析を試みられている。「交感」という概念は、「近代のヨーロッパ文学では外部世界と内部世界、外面と内面、自然と精神、世界と自己などの対応・相関性をとらえる概念」(野田, 2003, p.40)であり、「人間世界の出来事と自然現象とのあいだには、【中略】何かつながりや関係があるかも知れないという思考」(野田, 2007, p.18)だと定義されている。草花を愛で、空を仰ぎ、生き物をいつくしみ、土を喰む。私たちはこのような繋がりがあるときは畏敬の念をもって、またあるときは至福の喜びを抱いて、またあるときは悲哀の涙にくれながら太古より謳ってきた。「うた」や「ものがたり」はこうした一瞬一瞬をことばにとどめているのだ。その味わいを人と自然の分かちがたい交感として再認識させてくれるのが野田先生の語り部としての姿だと思う。

また、「交感」をキーワードに野田先生とお話しすることは、私にとっての「交歓」でもある。2009年から数年間、そのような「交歓」の時を過ごす恩恵にあずかった。たまたま同じ大学で兼任講師として教鞭をとっていたのだ。出講日や講師控え室が同じだったという偶然によって、立教大学内の会議や合宿や懇親会でお話するのはひと味もふた味もちがう雰囲気の中で、自然・文学・ことばについて、語り合った。あまりに仲が良いので、まわりから「竹馬の友」と呼ばれたほどである。

思い出は尽きない。野田先生はご退任後も、客員研究員としてESDセンターに残られるとともに、学部や大学院、そしてセカンドステージ大学でも兼任講師として教鞭をとられると聞く。益々のご活躍を祈ってやまない。「竹馬の友」との交歓をこれからも持続させたいと密かに念じている。野田先生、本当にありがとうございました。これからも宜しくお願い致します。

(参考文献は野田研一教授業績一覧をご覧ください。)